

時標

山梨へ来て今年で4年目になる。私の専門である災害について聞くと、「山梨はずっと災害がないので、大丈夫です」とみんなが答える。秋田も從來水害が少ない県であった。しかし、今年には水害被害に見舞われた。その「災害は忘れ

た頃にやってくる」のである。山梨へ来て最初の1月に行政の人に、大災害が起きると役所が使えなくなり、職員だけが参集できませんよと言ったら、怪訝そうな顔で見られた。その2か月後に東日本大震災が発生し、言った通りのことが起きたが、彼はどう思った

であろうか。では、一般の住民はどうであろうか。水害被害にあった人について調査すると、被害経験があったため、うまく対応できた人と、被害経験があったのに対応できなかった人がいた。これは水害に限らないが、災害を高頻度型小災害と、低頻度型大災害に分けて考えていないからである。

水害で言えば、前者はよくある、水路や下水道から水が溢れる内水氾濫で、後者は河川の堤防などが決壊する破堤災害に相当する。被害の経験がうまく生かされなかったのは、過去経験した水害が小さく、それに対応した行動をとっていたら大水害に対応できなかったためである。よくある内水氾濫のことを考えつつも、いざ破堤氾濫が起きたら、

大洪水意識した対策 日頃から



末次 忠司
山梨大大学院 教授

どう対応したらよいか考えておくことが重要である。まずは洪水ハザードマップを見てみよう。最大被害の目安が示されている。計画規模の雨が降って、近くの堤防が決壊すれば、これに近い状況となる。浸水の深さが大きく

なるのは何が原因か、避難所までの道路はどうかという視点で見よう。ただし、マップには時間情報がないので、避難を考える場合は浸水の挙動を考える必要がある。例えば、釜無川の甲府側が破堤すれば、氾濫水は地形に従って南東方向に流れてくる。この場合は、家の2階に

る。その速さは破堤箇所の近くを除けば、早歩きぐらいのスピードである。この流れから離れるように、なるべく高い道路を使って避難するのがよい。一方、笛吹川の甲府側が破堤すれば、氾濫水は川に沿うように流れてくる。

水害が発生する目安は大雨警報（甲府の平地で1時間に40ミリの発令である。記録的短時間大雨情報（1時間に100ミリ）が出れば非常に危険な状況が予想されるし、特別な警報が出れば、最大限の注意を要する事態となる。しかし、避難することが必ずよいとは限らない。浸水の深さが50センチ（ひざの高さ）以上になると、浮力などで歩きにくくなる。また、道路と水路の境界が不明となり、転落する危険がある。この場合は、家の2階に

避難する。一方、車で避難する途中で浸水被害にあう人もいる。水深がマフラー以上になるとエンジンストするし、高架橋の下を道路が低く通っているアンダーパスは特に危険である。水圧は思った以上に大きく、浸水中ではドアを開けられなくなり、パワーウインドーがきかなくなる。ヘッドレストの金属部分の先端をガラスとドアのすき間に勢いよく入れると窓を割って脱出できる。

私が常日頃から言っているのは、いろいろな対策を日常行っていれば、いざ大洪水になっても、「大きな洪水だったけど、対策をやっていたから、被害が少なくてよかったね」と言えるように頑張ろうということである。いつか来る大水害に備えて。

すえつぎ・ただしさん 1958年兵庫県生まれ。九州大大学院修士課程修了。専門は河川防災・減災。著書に「水害に役立つ減災術」など多数。国土交通省国総研河川研究室などを経て、2010年から現職。